

疊字連歌疊字索引稿

岩 下 紀 之

一 疊字連歌について

1

室町時代に行なわれた付合による文芸を連歌と称するならば、その内実は様々な形態があったとしなければなるまい。『新撰菟玖波集』に収録されたのは有心連歌と和漢のみであるけれども、その他に誹諧の連歌としてかなり多くの作品が伝えられている。

有心連歌と誹諧連歌を分つものは何か。原則として歌語を用いて作られる連歌を有心連歌とするなら、それ以外の用語を使用した作品は、その瞬間に原則として誹諧になるわけである。この意味において疊字連歌は有心連歌に属することはできない。一方滑稽卑俗を誹諧の本質とするならば、疊字連歌はそこからもはずれるように思われる。疊字連歌はいわばこうした中間的な位置に存在するといえよう。

今までに紹介された疊字連歌で管見に入ったのは次の五つである。^{注一}

一 内閣文庫蔵「賦疊字連歌」

疊字連歌疊字索引稿

二 河野信一記念文化館本「疊字連歌」

三 天理図書館蔵「応永二十年疊字連歌」

四 東山御文庫蔵「宗祇独吟百韻」

五 統群書類従本「文章連歌五十韻」

一は二条良基の独吟、二は御、千、恵、固、会による五吟、三は伝阿独吟、四は宗祇独吟、五は不明の作者によるおそらく独吟であろう。五だけが五十韻で、他はみな百韻であるから、全部で四百五十句あるはずだが、このうち二は冒頭が切り取られていて発句から第三までが欠けている。四は途中で一句欠であるから総句数は四百四十六句ということになる。大体成立順にならべたつもりであるが、二条良基から宗祇にいたるまで、連歌の盛んな時に詠まれたものであることは明らかである。このうちで三だけは、応永二十年十二月五日の日付が明記されている。したがって、他は一と三は作者の生存時期から、二は詠まれた内容から、おおよそを推定したのであり、五に至っては一切成立年代を明らかにできない。五つともに転写本であるから、三を除いて書写した人々は、原本の最初に書かれていたはずの張行年月日を写しとどめる必要性を認めなかったのであろう。ただし二は切断のため詳細は不明である。またこの五種はともに孤本であって他の写本の伝来を聞かない。まことに細々と伝わったものである。宗祇の独吟は江戸初期の俳書に引用されていて有名であったにもかかわらず、百韻全体としては東山御文庫本の一本のみである。けれども室町期の誹諧連歌の作品で、百韻ごと伝わっているのは兼載独吟のみであるのに比べれば、疊字連歌のほうが多量ともいえよう。もっとも守武千句の出現後は情況がかわるのだが。

疊字の意味するものは何か。『岩波古語辞典』には、「漢字二字から成る熟語」と定義し、これは「日本の用法らしい」と注記している。ところが疊字連歌においてはそれより広い範囲を想定しなければならぬようである。

不相応、言語道断など、漢字三字ないし四字の熟語がある。口惜、眉目など、訓読したと思われるものもある。自ら疊字連歌と名乗っている良基独吟から例を引いてみよう。

3 なにゆへに抑月のかすむらん

4 仰こくとくゆきそのこれる

この場合、仰（そもそも）、仰（おおせ）などという語が疊字ということになろう。これらは普通和歌や連歌に詠まれる語ではなく、散文の語、さらに言うならば文書等に一般的に使われる語彙である。このような語をも含み込んで疊字と称したのである。こう確認してみると、厳密に言えば疊字連歌と称していた確証がない作品、つまり二は冒頭部が切断されており、一方五は文章連歌と称しているのだが、これらも大部分の句に音読する熟語が詠まれているのはもちろん、二の11、

豫思ひ儲しすみかにて

五の4

罷帰るや遠きかりかね

のように、豫（あらかじめ）、罷帰る、といった語を用いた句があって、良基の独吟と同質な作品となっており、疊字連歌として一まとめに取扱うことができると思うのである。すなわち、疊字とは音読する熟語はもちろん、訓読するところの、主として文書記録などに使われる、歌語以外の語、を意味する。ただし、この定義によってもなお例外とせざるを得ない句が散見する。

良基独吟のうち、

44 さりぬるころも思出はなし

55 人そうき涙をそてに憚りて

65 山寺や雪の名残の道分て

78 霧にさいきるあけほのゝ山

伝阿独吟の

36 夜かけになればさむき秋かせ

58 一枝をくる梅やそての香

文章連歌では

10 其後よりの雪のとをやま

16 色々にある人の偽

これらの句には、さきに下した定義にあてはまる語を見出すことができない。このように疊字を含まない例があるというのは、何と云っても疊字連歌が気楽な作品であって、こうした連例をも許容しうる形態であったといふべきなのであろう。また宗祇独吟にも、

55 雲間より月は光陰する物を

94 きのふけふとて過る光陰

とあって、前者が光陰を、後者が時間を示すにせよ、一つの百韻に、同じく「光陰」という語を使用するのは避けられるべきだったのであろう。

さて、室町時代において、これら疊字はどんな意味あいでも用いられていたであろうか。同じく漢語を用いるということで、和漢連歌との比較が考えられるであろう。見やすいものとして、『菟玖波集』『新撰菟玖波集』の和漢と共通の語があるかというに『菟玖波集』から次にあげる二例を見出したのみである。

事皆任自然

喜ふも歎くもともに夢のうち 順覚

これに対し、良基独吟

66 自然／＼と春にこそなれ

67 身のほどはげに是非もなし花の夢

伝阿独吟

82 自然ときゆるみねの横雲

83 花をみて余念もなきは朝ほらけ

同じ「自然」という語に対し、『菟玖波集』の和漢の例では自ら然るべき道理という、いわば漢語本来の用法であるのに対し、疊字連歌では副詞的に用いており、軽い使い方と言えよう。それに対して次の例では、両者に共通の気分を感じる。

隔海故郷遠

老のむかしは夢にだに見ず 夢窓国師

伝阿独吟、

6 とをき故郷やなをしのふらん

7 雲かゝる山は雨中の夕にて

「故郷」という語感は、望郷の念をみちびき出すのであるから、両者に共通の気分がただようのは当然である。わずかに二例から言うのは乱暴かもしれぬが、和漢において使われる漢語は必ず文学的な語として用いられる。和漢は連歌と漢詩とが同じ百韻で競い合うものだからである。それに対し、疊字は、必ずしも文学的であることを要しない。というよりむしろ、たまたま文学的になるのをさまたげるのではないが、ねらいは明らかに日常性にあったと思われる。

いったい疊字連歌で用いられている疊字は、室町時代の言語として極めてありふれたものであったと思われる。『文明本節用集』『日葡辞書』にあたってみると、この語彙のほとんどが両辞書にもに検索することができる。二つの辞書はいずれも文学語にかたよらない、実用的な目的で作製されているのであるから、ここでいう疊字もまた、日常的な語彙であったと考えられる。したがって疊字連歌はまず日常語を詠みこむという点に作意があったものとしなければなるまい。

ところで、とりあげた五つの疊字連歌の疊字と目される語を調べると、共通に用いられている語がかなり目につく。五種に共通する語はないが、四回使用されたのが、虚言、斟酌、徒然、不審、不慮の五語、三回用いられた語は、活計、機嫌、所存、所望、随分、存知、退屈、等閑、本意、慮外と十語を数える。二回用いられている語はここに記すにおよばない。

最初に計算したように、五種の疊字連歌といってもわずかに四百四十六句にすぎないのであるから、この頻出する語計十五という数はかなり多いものと言わなければならない。またこの各疊字連歌が、室町時代という共通した

基盤を持つことも明白である。なぜなら、これらの語は当時の日記文書類にしばしば見え、代表的な文学作品としては『太平記』等に共通する語である。これらの語が漢籍に典拠を持つとしても、実際に記述し、あるいは口頭で語った時、典故をもつ語として意識的に使用されたとは一寸考えられないであろう。『文明本節用集』にあたってみると、斟酌という語は二回あらわれる。一個所では、「斟酌損益」とし、割注で「出師表」と典拠を指摘している。もう一個所では「斟酌」として、「計行意也」と語釈を加えているのである。疊字連歌での実例について見れば、良基独吟、

5 ちる花に斟酌もなき風ふきて

河野記念館本では、

43 口外もれてうき名こそたて

44 我はかり斟酌すれとかひもなし

宗祇独吟では、

63 酒も哉酌酌迄はしらすとも

64 心ありける人の斟酌

文章連歌では、

27 期後信といふをうちたのみ

28 斟酌もなく人は恋しき

これらの「斟酌」は、遠慮とか手かげんというような意味に解されよう。決して諸葛孔明の出師表の結び近くの文を意識しているとは見られまい。同じようなことは、指南とか閑居などにも言えるのであって、一々中国の故事を

思い起こしながらこうした語を発していたということはあるまい。要するに疊字連歌における疊字は、漢語の形態はとっているけれども、漢詩漢文的な情趣を目的とせず、当時の日常的生活を反映しているのである。

3

以下、作品から例をあげてみよう。

良基独吟、

26 身のうきわさや至極なるらん

27 露ほども何活計のあるべきに

28 世のたのしみのなきも貧樂

観念的なものにとどまると言わざるを得ないが、撰家当主たる二条良基が作者である作品に、このような貧乏暮しの景を見るのは面白い。疊字連歌の形態を得てはじめて表現しえた内容と言うべきであろう。このような経済的内容は、宗祇独吟にも例がある。

68 さも難堪のすまの秋風

69 露ほども利潤おもふに塩焼て

また、

72 うらやましきはよその売買

73 永樂のさしも多を所持もせて

前者は須磨に塩焼というきまりきった付合に、利潤という全く世俗的な語をとりあわせたところ、江戸時代にすで

に有名だった後者の、永楽銭という素材を表面に出したリアリズム、いずれも効果をあげている。また訴訟も題材になっている。良基独吟、

80 いたうかるべき冬の在京

81 月の影さむきばかりを訴訟にて

宗祇独吟、

39 月なに、丁寧してかまたる覧

40 秋の訴訟はさらにうき中

と、両者ともにさむさむと詠まれている。

前号でも述べたことであるが、近い時代の具体的事件を詠み込むことができたのも、疊字連歌なればこそである。河野記念館本、

52 公家武家ともに和睦成けり

53 將軍の准後の宣を蒙りて

54 相国寺こそ五山にはいれ

三つとも足利義満時代の大事件であった。

仏教語をそのまま用いる可能性も疊字連歌には開かれている。同じく河野記念館本、

95 さすかけに心ほそきは寂後にて

96 御名をたのむはいつも十念

97 往生は心ひとつの所為そかし

98 彼極樂をおほしめしやれ

和歌や連歌は常に大和言葉を用いるのであるから、このような仏教語を直接詠みこむことは困難で、多くはおぼろげな表現になってしまふのは勅撰集の釈教歌の部で明らかである。

『誹諧連歌抄大永本』にこのような例がある。

仏もけんくわするとこそきけ

釈迦はやりみたは利剣をぬきつれて

この場合「けんくわ」「利剣」は疊字連歌に詠まれてもおかしくないとと思われる。何かの疊字連歌から抜き出された可能性もある。けれども、本稿で見る疊字連歌においては、仏教の正統信仰については特に疑いを持たれていないように見える。『誹諧連歌抄』の基準で撰ばれたこの句では、釈迦も阿弥陀も喧嘩までさせられ、容赦なく懸詞の題材として笑い物にされている。疊字連歌はまだ中世的な秩序の中で、多少なりとも安定感ある世界にとどまっている。少くとも『犬筑波集』の厳しい嘲笑は見出すことができない。

4

疊字連歌として作品が伝わっているものについては、以上あらあら眺めてみた。本文が伝わらなくとも、諸記録によって疊字連歌の興行が知られる。嘉吉三年二月二十六日（『看聞御記』）、長享二年十一月五日（『実隆公記』）、長享二年十一月二十五日（『実隆公記』）などである。^{註二}その他、『誹諧連歌抄大永本』には、

疊字連哥発句

花のころは御免あれかし松のかせ

という句がおさめられている。ところが『犬筑波集』の諸本において、この発句を収める本でも、疊字連哥発句という詞書は書かれていない。このことは単なる偶然かも知れないが、大永年間までは疊字連歌にそれなりの興味を感じていたのが、後の人はそれには関心がなくなつて、この詞書、あるいはこの発句そのものを評価しなくなつたとも考えられよう。結局、南北朝から室町時代に至るまで、疊字連歌はかなり活発に詠まれていたといふことができる。

ところで全巻にわたつて特殊な語彙を詠み込む例としては他にこのようなものがある。『誹諧連歌抄大永本』に、
比丘尼連哥の発句にちる花をとめてみはやななさしませ

おけしからすや又もこん春

この書き方からみて、おそらく百韻全部に比丘尼言葉詠み込んだのであろう。近世に入つては、奴俳諧があり、承応から延宝にかけて流行したものという。これも全編にわたつて、奴言葉詠みこんだものであろう。

この二つと比べてみれば、疊字連歌の制約はゆるやかであつて、漢詩文に用いられる漢語も、書簡や文書に用いられる記録語も、また仏教語も、日常語も、どれを用いてもよいのであり、これらは狭いサークル、例えば尼僧や男伊達だけが用いる特殊な語ではなかつた。逆な面から考えると、制約のゆるさは微温的に感じられて、疊字連歌という形態には近世の誹諧の新時代を切り開くべきエネルギーがなかつたのであろう。現に初期の芭蕉の天和年間の作風に深い影響を与えたのは、『莊子』や『杜詩』などの本格的な漢詩文であつた。けれどもその時期を過ぎた例えば有名な『猿蓑』のこの付合を見てみよう。

ゆがみて蓋のあはぬ半櫃

凡兆

草庵に暫く居ては打やぶり

芭蕉

いのち嬉しき撰集のさた

去来

傍線を附した語はいずれも疊字に属するわけであり、草庵や無沙汰などが疊字連歌で実際に詠まれている。これらは漢語であるからには決して歌語ではありえず、また連歌に詠み込まれたこともない。かと言って、例えば、

髭風ヲ吹て暮秋歎メル誰が子ゾ

(『虚栗』)

のごとき、漢語によって詩情を強いるような意図もない。ただ俳諧の語として使ったそれが、たまたま漢語であったという体であろう。けれどもこの種の語彙を定型に詠み込む試みが、すでに室町時代においてなされていることこれは必ずしも忘れられてよいことではあるまい。

注一 それぞれ翻刻は、一伊地知鉄男氏「花の本連歌の興行は禁止された——二条良基の疊字連歌一卷——」(『中世文学』15号)。二、拙稿「連歌懐紙二種 松平文庫本『文明八年五月賦何木連歌』と河野信一記念文化館本『疊字連歌』について」(『愛知淑徳大学論集』第七号)。三は本文『天理善本叢書古俳諧集』所収。翻刻は、福井久蔵博士『犬筑波集研究』と諸本「附録「応永の疊字百韻と東山時代の百韻の式」」。四は、伊地知鉄男氏「和歌・連歌・俳諧——宗祇・兼載の俳諧百韻その他を紹介して俳諧連歌抄の成立に及ぶ——」(『書陵部記要』第3号)

注二 両角倉一氏「堂上連歌壇の俳諧——文明十八年和漢狂句その他——」(『連歌とその周辺』所収)による。

二 疊字連歌疊字索引稿

凡 例

- 一 本稿は管見に入った五種の疊字連歌中の、疊字と目される語彙を五十音順に配列したものである。
- 一 その際の読みは、『文明本節用集索引編』（勉誠社版）にならない、これを片仮字で示し、配列は現代仮字遣による。
- 一 『文明本節用集』に見出されない語については『日葡辞書』（山根波書店『邦訳日葡辞書』ならびに勉誠社版）の読みに従い、これも現代仮字遣により配列した。両辞書に見あたらない語については私意による。
- 一 各語の示し方は、原本の漢字を現行の字体で示す。但し原本が仮名書の場合はそのまま。次に『文明本節用集』の読み、次に『日葡辞書』のつづりを示す。さらに各疊字連歌中の位置を、それぞれの通し番号（発句を1、挙句を100とする）によって示す。その際各連歌は、良基、御、伝阿、宗祇、文章と略称する。

※ 本誌前号の拙稿につき、疊字連歌の第十六句を「寂寞」第二十八句を「虚言」と読むべき旨、湯之上早苗氏、両角倉一氏の教示を頂いた。その方が意味が通ると思うので訂正して索引稿を作成した。

〔あ〕

豫	アラカジメ	Aracajime	御 11
案内	アンナイ	Annai	良基 31
以後	イゴ	Igo	御 62・伝阿 67
遺恨	イユン	Icoun	御 65・伝阿 90
委細	イサイ	Isai	御 60
聊	イササカ	Isasaca	良基 48
意趣	イシユ	Ixy	伝阿 94
一期	イチユ	Ichigo	伝阿 47
一切	イツサイ	Issai	御 59
		Ixxet	
一旦	イツタン	Ittan	御 47・伝阿 71
一篇	——	Ippen	宗祇 5
違変	イヘン	Ihen	宗祇 16
隠居	インキヨ	Inqio	宗祇 31
音信	インシン	Inxin	御 89・文章 13
雨中	——	Vchü	伝阿 7・宗祇 8

胡乱	ウロン	Vron	宗祇 14
有名無実	ウミヤウムシツ	—— Mujit	御 29
永日	エイジツ	Yejit	伝阿 31・文章 33
英雄	エイユウ	Yeyü	宗祇 98
永楽	エイラク	Yerracu	宗祇 73
依怙	エコ	Yeco	宗祇 70
会尺	エシヤク	Yexacu	御 46
悦喜	——	Yecqi	御 9・伝阿 99
庇弱	ワウシヤク	Vöjacu	良基 24・宗祇 23
往生	ワウジヤウ	Vöjo	御 97
仰	ヲホセ	Vöxe	良基 4
越度	ヲツド	Votdo. 1,	伝阿 55
		vochido	
慇懃	ヲンユン	Inguin	宗祇 65
隠蜜	ヲンミツ	Vonmit	宗祇 48

〔か〕

雅意	海上	皆是	快然	懷中	外聞	学匠	如此	加護	畏	花族	活計	和陸	閑居	閑寂
ガイ	——	——	クワイゼン	クワイチウ	グワイブン	ガクシヤウ	カクノゴトシ	カゴ	カシコマル	クワソク	クワツケイ	クワボク	カンキョ	——
Gai	Caixò	Caife	Quaijen	Quaichü	Guaibun	Gacuxò	Cacunogotocu	Cago	Caxicomari	Quazocu	Quacqei	Quabocu	Cangio	——
御 35	伝阿 86	御 99	御 64	良基 75	宗祇 18	御 58	文章 3	御 18	良基 33・文章 15	宗祇 91	良基 27・御 48	宗祇 51	御 52・宗祇 85	良基 41

疊字連歌疊字索引稿

眼前	堪忍	観音	勧盃	寒夜	奇恠	機嫌	寄特	規模	隔心	客人	客来	窮窟	休息	旧都	御意	器用
——	カンニン	——	——	——	キクワイ	キゲン	キトク	キボ	キヤクシン	キヤクジン	——	キユウクツ	キウソク	——	ギヨイ	キヨウ
Gajen	Cannin	Quannon	Quanpai	Canya	Qiquai	Qiguen	Qidocu	Qibo	Qiacuxin	Qiacujin	Qiacurai	Qicut	Qiusocu	Qinto	Guioi	Qiyò
御 26	良基 83・伝阿 91	御 19	御 15	伝阿 68	御 36・宗祇 32	良基 6・宗祇 86	文章 29	宗祇 95	宗祇 46	良基 62	文章 18	宗祇 82	良基 69・宗祇 59	伝阿 87	文章 39	宗祇 92

五七

愚癡	グチ	Guchi	伝阿 46
如件	クダンノゴトシ	Cudanno gotoxi	文章 9
公家	クゲ	Cugue	御 52
究竟	クキヤウ	Cugio	宗祇 54
近来	キンライ	Qinrai	良基 88
禁制	キンゼイ	Qinjei	良基 94
近所	キンシヨ	Qinjo	御 38
近衆者	キンジユ	Qinjū	御 21
謹言	キンゲン	—	御 100
帰路	キロ	Qiro	御 8
居住	キヨヂウ	Qiojin	伝阿 79・文章 47
御札	ギヨサツ	Giosat	御 66
虚言	キヨゲン	Qeogon	伝阿 38・文章 50
胸中	キヨウチュウ	Qiochu	良基 47・御 28
兄弟	キヤウダイ	Qiodai	良基 51
恐悦	キヨウエツ	Qioyret	御 84
			良基 74・文章 14

口惜	クチラシ	Cuchiuoxi	良基 85
慶賀	—	Qeiga	良基 1
計会	ケイクワイ	—	良基 18・文章 36
稽古	ケイコ	Qeico	宗祇 93
警固	ケイゴ	Qeigo	宗祇 35
輕微	ケイビ	Qeibi	良基 25
契約	ケイヤク	Qeiyacu	良基 73・伝阿 56
下向	ゲカウ	Qeeco	良基 64
懈怠	ケダイ	Qedai	御 70・宗祇 50
兼日	ケンジツ	Qenjit	御 78
検断	ケンダン	Qendan	良基 96
光陰	クワウイン	Quō-in	宗祇 55・94
後悔	コウクワイ	Cōguai	良基 58・伝阿 53
口外	コウグワイ	Cōguai	御 42
後信	—	—	御 73・文章 27
降雪	—	Cōxet	御 31
後年	—	Cōnen. 1,	伝阿 10
		Gonen	

荒涼	クワウリヤウ	Quōrio	宗祇 96
光臨	クワウリン	Quōrin	良基 63・御 14
古郷	コキヤウ	Cogio	伝阿 6
極楽	ゴクラク	Gouracu	御 98
五山	—	Gosan	御 54
古寺	コジ	Coji	伝阿 81
御所	—	Goxo	御 22
故障	—	Coxo	宗祇 30
期	ゴス	Goxi	御 73・文章 27
此程	コノホド	Cono fodo	文章 17
御免	コメン	Gomen	良基 92
言語道断	言語同断	—	—
	ゴンゴダウダン	Gōgodōdā	良基 86・宗祇 62
懇志	コンシ	Conxi	宗祇 43
今夕	—	Conxeqi	伝阿 73
今日	コンニチ	Connichi	伝阿 25

【ヤ】

罪科	ザイクワ	Zaigwa	良基 95
在京	ザイキヤウ	Zaigio	良基 80
際限	サイゲン	Saiguen	宗祇 97
叡後	サイゴ	Saigo	御 95
細々	—	Saisai	文章 7
叡初	サイシヨ	Saixo	伝阿 77
在所	ザイシヨ	Zaixo	伝阿 18
叡前	サイゼン	Saijen	御 63・伝阿 66
催促	サイソク	Saisocu	文章 1
叡中	サイチウ	Saichū	良基 30
座禪	ザゼン	Zajen	御 24
祭	サツス	Saxxi	御 13・文章 19
山家	—	Sanca	伝阿 41
参会	サンクワイ	Sanguai	御 74・宗祇 21
散々	—	Sanzan	良基 54
覽時	ザンジ	Zanji	伝阿 76
四海	シカイ	Xicai	良基 99

覺字連歌覺字索引稿

六〇

雖然

シカリトイヘドモ

Xicaredomo 文章 11

然へから

シカルベシ

Xicarubei. 1, 良基 13

xicarubexij

柩候

シコウ

Xicó 御 22

至極

シゴク

Xigocu 良基 26・伝阿 11

始修

——

伝阿 30

治定

ヂヂヤウ

伝阿 24

自然

シゼン

Hinen 良基 66・伝阿 82

Xijen

次第

シダイ

Xidai 良基 85・伝阿 64

指南

シナン

Xinan 良基 38

時分

ジブン

Hibun 御 85・伝阿 13

謝す

ジヤヌ

Taxi 御 67

差別

シヤベツ

Xabet 宗祇 79

自由

——

御 34・文章 20

周章

シウシヤウ

Xúxó 宗祇 36

執心

シフシン

Xúxin 伝阿 54

十念

——

Tunen 御 96

終夜

シムウヤ

Xúya 伝阿 51

酒栄寿得

——

良基 29

入御

ジニギヨ

Iugnio 良基 87・文章 5

出引

——

文章 38

述懐

シヌツクワイ

Xucquai 御 82・宗祇 10

出物

——

御 44

出来

シヌツライ

Xutrai 御 20

寿命

ジニシヤウ

Iurnio 良基 100

樹林

——

御 99

遵行

ジニシキヤウ

Iunguio 宗祇 89

准后

ジニシムウ

Iungo 御 53

順風

ジニシフウ

Iunpú 伝阿 17

自余

ジヨ

Iiyo 御 56

所為

シヨイ

Xoi 御 97

承引

——

御 45・宗祇 28

生かひ

生涯

Xóin

生かひ

シヤウガイ

Xógai 伝阿 96・宗祇 24

賞翫	シヤウクワン	Xôquan	宗祇 44
將軍	シヤウケン	Xôgun	御 53
相国寺	シヤウコク	Xôcokuji	御 54
勝事	シヨウシ	Xôji (42)	宗祇 25
常住	シヤウヂウ	Tôgiû	伝阿 70
生前	シヤウゼン	Xôjen	宗祇 52
賞罰	シヤウハツ	Xôbat	御 49
上表	シヤウヘウ	Xôfeô	宗祇 29
道遙	セウヨウ	Xôyô	宗祇 90
上洛	シヤウラク	Xôracu	良基 79・伝阿 16
正路	シヤウロ	Xôro	良基 97
所見	セイロ	—	
如在	シヨケン	—	宗祇 47
諸事	シヨサイ	Iosai	御 72
諸宗	シヨシ	Koji	文章 26
初春	シヨシユウ	Koxû	御 58
助成	—	Koxun	伝阿 60
	—	Lojô	良基 77

所詮	シヨセン	Xoxen	伝阿 23
所存	シヨゾン	Xozon	良基 98・伝阿 92
初冬	—	Xotô	文章 2
所望	シヨマウ	Xomô	良基 82・伝阿 33
尽期	ジンキ	Iingo	文章 24
深更	—	Xincô	良基 20・伝阿 75
真実	シンジツ	Xinjitt	御 61
斟酌	シンシヤク	Xinxacu	御 27・伝阿 1
心中	シンヂウ	Xingju	良基 5・御 43
進退	シンダイ	Xindai	宗祇 64・文章 28
神妙	シンハウ	Xinbeô	伝阿 78
辛勞	シンラウ	Xinrô	宗祇 53
随分	ズイブン	Zuibun	宗祇 100
睡眠	スイメン	Suimen	伝阿 27
			良基 60・伝阿 39
			宗祇 38
			伝阿 5

推量	スイリヤウ	Suirio	文章 37
頗	スコブル	Sucoburu	御 25
数日	スジツ	Sujit	宗祇 6
静謐	セイヒツ	Xeifit	御 51・宗祇 66
歳暮	セイボ	Xeibo	伝阿 3
積鬱	セキウツ	Xeqint	御 88・文章 40
寂莫	セキバク	Xeqibacu	御 16
是非	ゼヒ	Iefi	良基 67・伝阿 45
宣	——	——	御 53
禅僧	ゼンソウ	——	御 55
千万	——	Xenban	文章 42
左右	サウ	Sò	伝阿 20
草庵	サウアン	Sòan	伝阿 49
相違	——	Sò-i	御 85・伝阿 57
早朝	サウテウ	Sòchò	伝阿 43
疎遠	ソエン	Soyen	良基 36・御 83
楚忽	ソコツ	Socot	良基 93・御 92
訴訟	ソシヨウ	Soxò	良基 81・宗祇 40

卒爾	ソツジ	Sotji	宗祇 27
抑	ソモンモ	Somosomo	良基 3
疎略	ソリヤク	Soraacu, 1, soriacu	良基 42・宗祇 12
就其	ソレニツイテ	——	文章 23
存生	ゾンジヤウ	Zonjò	伝阿 48
存	ゾンズ	Zonji	文章 19
存知	ゾンチ	Zonji	良基 89・御 30
退屈	タイクツ	Taicut	伝阿 29・宗祇 13
大切	タイセツ	Taixet	文章 46
退転	タイテン	Taiten	良基 40
泰平	タイハイ	Taifei	宗祇 61
大略	タイリヤク	Tairiacu	良基 9・宗祇 57
他行	タギヤウ	Taguio	御 90

他所	タシヨ	Faxo	良基 90
頼存	タノミゾンブル	—	文章 49
断簡	—	—	宗祇 37
談合	ダンカフ	Danco	良基 12
智恵	チエ	Chive	御 59
遅参	チサン	Chisan	文章 1
遅々	チチ	Chichi	良基 7
籌策	チウサク	Chūsacu	良基 14・宗祇 88
中絶	チウゼツ	Chūjet	御 7
夙夜	チウヤ	Chūya	伝阿 98
寵愛	チヨウアイ	Chōai	宗祇 17
長遠	チヤウラン	—	良基 100
超過	テウクワ	Chōqua	宗祇 99
長閑	—	—	良基 2
停止	チヤウジ	Chōji	良基 76
頂戴	チヤウダイ	Chōdai	良基 34
眺望	テウバウ	Chōbō	宗祇 42
以次	ツイデヲモツテ	—	—

覺字連歌覺字索引稿

丁寧	テイネイ	Teinei	文章 31
天下	テンカ	Tenca	宗祇 39
天氣	—	Tenqi	良基 100
田舎	—	—	伝阿 85
田舎	—	—	良基 8
纏頭	テンドウ	Tendō	宗祇 26
等閑	トウカン	Tōcan	御 71・宗祇 45
到来	タウライ	Tōrai	文章 6
逗留	—	Tōriū	御 91
徒然	—	Tojien	宗祇 7・文章 32
都鄙	トヒ	Tofii	良基 23・伝阿 31
都鄙	トヒ	Tofii	宗祇 9・文章 45
都鄙	トヒ	Tofii	御 87・宗祇 67
就中	ナカンヅク	Nacanzucu	御 77
難堪	ナンガン	Nangan	宗祇 68
南都北嶺	—	Nanto—	御 57

[な]

六三

人間 ニンゲン 御 76
 年来 ネンライ Nenrai 伝阿 89

[pt]

徘徊 ハイクワイ Raiguai 宗祇 87

媒介 ハイカイ Baicai 宗祇 84

売買 ハイバイ Baibai 宗祇 72

廃忘 ハイマウ Faimô 文章 43

将又 ハタマタ Patamata 御 80・文章 22

拔群 ハツクン — 良基 49

晚景 バンケイ Bangei 御 6・伝阿 26

Banguai

万事 バンジ Banji 御 33

蟲貞 ヒイキ Fijqi 良基 46・宗祇 83

彼岸 ヒガン Figan 御 17

必定 ヒツチャウ Fitegiô 良基 59

比類 ヒルイ Firui 伝阿 37

披露 ヒロ Firô 宗祇 41・文章 30

便宜 ビンギ Bingu 良基 56・伝阿 8

貧榮 ヒンラク Finracu 良基 28

無音 — Buiin 良基 91

不運 フウン Fuun 良基 17

不会 フクワイ — 御 84・伝阿 72

不覚 フカク Fucacu 良基 43・御 37

武家 — Buge 御 52

無骨 ブコツ Bucotra 良基 32

無沙汰 ブサタ Busata 良基 10

扶持 フチ Fuchi 文章 48

不定 フチャウ — 伝阿 9

不審 ふしむ — 御 89・伝阿 40

フシン Fuxin 宗祇 80・文章 42

無人 ブジン Bunin 御 12

浮生 フセイ Fuxei 良基 19

無双 ブサウ Busô 宗祇 1

不相応 — Fusôûô, 1, 宗祇 76

fusôûôgã

不知案内 フチアンナイ

Fuchiananai

文章 34

仏意

ブツイ

But-i

良基 21

仏暁

——

——

伝阿 80

物念

——

——

御 18

拈底

フツソウ

Bussô

良基 72

豊饒

フツテイ

Futtei

良基 37

風聞

フブン

Bunhō

伝阿 100

不慮

フリヨ

Fūbun

良基 53

無力

フリヨク

Furio

良基 61・御 4

分明

ブンミヤウ

Buricou

伝阿 15・宗祇 20

平臥

ヘイグワ

——

良基 57

平均

ヘイギン

Feigua

御 23

僻案

ヘキアン

Feigun

宗祇 81

片時

ヘンシ

Feqian

宗祇 78

返事

ヘンジ

Fenxi

伝阿 21

返事

ヘンジ

Fenji

伝阿 93

疊字連歌疊字索引稿

返報

ヘンホウ

Fenpô

良基 15

忘却

バウキヤク

Bôgiacu

伝阿 88

法師

ホフシ

Fôxi

御 56

乏少

ボウセウ

——

良基 50

忙然

バウゼン

Bôjien

宗祇 58

朋友

ホウユウ

Fôyû

伝阿 32

本意

ホンイ

Fon-i

良基 70・御 10

〔末〕

——

——

伝阿 34

毎事

マイジ

Maiji

伝阿 62

毎度

マイド

Maido

文章 12

毎年

マイネン

Mainen

伝阿 84

罷

マカル

Macari

御 40

罷帰る

マカリカヘル

Macaricayeri

文章 4

満足

マンゾク

Manzocu

御 55・文章 25

方法

——

Manbô

良基 22

未熟	ミジユク	Mijucu	伝阿 22
眉目	ミメ	Mime	宗祇 2
未明	ミメイ	—	御 41・伝阿 12
名号	ミヤウガウ	Miogo	文章 50
名字	ミヤウジ	Mioji	良基 71
冥慮	ミヤウリヨ	Miorio	宗祇 100
未練	ミレン	Miren	良基 11
無心	ムシン	Muxin	文章 21
無念	ムネン	Munen	御 69・伝阿 61
謀叛	ムホン	Mufon	御 50
明鏡	メイキヤウ	Meiqio, 1	宗祇 49
	メイケイ	Meoqio (*)	
	—	Meixun	伝阿 2
名所	メイシヨ	Meixo	伝阿 28
酩酊	メイテイ	—	宗祇 63
名譽	メイヨ	Meiyo	宗祇 75
迷惑	メイワク	Meiuacu	文章 41
召遣	メシツカウ	Mexiqucacai	文章 8

面目	メンボク	Menbocu	良基 84・伝阿 14
朦霧	メンモク	Memnocu	
勿躰	モツタイ	Mottainai	文章 44
	[ㄆ]		
約諾	ヤクダク	Yacudacu	御 79
抑留	ヨクリウ	Yocuriu	御 93
余残	ヨサン	Yozan	伝阿 59・宗祇 4
余念	ヨネン	Yonen	伝阿 83
余命	ヨメイ	Yonei	宗祇 22
	[ㄆ]		
落葉	ラクヨフ	Racuyô	伝阿 42
落涙	ラクルイ	Racurui	御 32・伝阿 52
落居	ラクキヨ	Racqio	良基 45
吏幹	—	—	宗祇 71
利潤	リジユン	Rijun	宗祇 69

老耄	老木	狼籍	老人	老後	歴覽	冷然	隣端	悋惜	旅宿	旅行	慮外	両度	聊爾	遼遠	陵夷
ラウモウ	——	ラウゼキ	ラウジン	ラウゴ	レキラン	レイゼン	——	リンジヤク	リヨシユク	リヨカウ	リヨグワイ	リヤウド	——	レウエン	リヨウイ
Rômó	Róbocu	Rójeki	Rójin	Rógo	——	——	Rintan	Rinjacu	Reoxucu	Reocó	Riognai	Riôdo	Reóji	Reóyen	——
宗祇 11	良基 68	良基 16・宗祇 19	伝阿 96	御 75	良基 35	御 5・伝阿 44	御 39	宗祇 15	伝阿 69	伝阿 4	宗祇 77	御 86	宗祇 56	宗祇 74	宗祇 60

露頭
ロケン

路次
ロシ

Rogen
Roxi

伝阿 95
良基 39